

異世界転移は草原スタート!?

著 ノエ丸
ill. まろ

勇者は
お城でVIP待遇、
俺は草原で
サバイバル



ヴィーシュ

ドワーフの鍛冶師。
頑固者だが、認めた相手の
面倒は最後まで見る。

アネモネ

こて
箒手で戦う実力者。
異名は「ステゴロお嬢様」。

アナスタシア

ある理由から「血濡れの魔女」と
畏れられる最強の冒険者。
冷酷に見えるがその本性は……？

宮野空(ソラ)

本作の主人公。ごく普通の高校生だが、
突然異世界の草原に飛ばされた。
持ち前の明るさで、ちょっとハードな世界も
面白おかしく生きていく。

佐々木翼(ツバサ)

ソラの幼馴染で、勇者として
王城に召喚された。
容姿端麗で性格もいい、
皆に好かれる完璧な人物。

マルコ

何かとソラの世話を焼く
頼れる先輩冒険者。
最近パーティメンバーが
家族を優先しており、切なそう。

シャロ

新米のタンクガール。
怖いもの知らずで、
どんな強敵にも笑顔で立ち向かう。

1. 異世界転移は草原スタート

とある草原——そこに一人の男がいた。

男は突然、地面に拳を叩きつけ、四つん這いになって叫ぶ。

「クソゲーやんけ!？」

その叫びは誰にも届かず、ただそこに生える草花だけが受け止めていた。

何もないこの草原で、一人寂しく佇むその男——俺の名前は宮野空。
どこにでもいる平凡な高校三年生だ。

そんな俺が、どうしてこんなことになっているのかというと……話せば長くなる。長くなるのだが、端的に言えば——

異世界に転移してしまった。

夢か何かだと思いたい……どうやら違うらしい。

俺の今の感覚は夢ではなく、ここがリアルな世界なのだと告げている。

顔を撫でる風、手足に触れる草の感触。

そのどれもが、普段感じているものと同じであると。

一度冷静になるために体育座りをし、状況を整理しようと考えを巡らせた。

今の俺の状況は、どう考えても異常だ。普通じゃない。

俺、何か悪いことした？ いきなりわけもわからない世界に放りこまれる理由なんて、これっぽっちも思い当たらない。

なぜこうなったのか。もう一度、今日の出来事を振り返ろう。

そう思いながら、俺は今朝の出来事を思い返した。



ピピピピッ……ピピピピッ……ピピピピッ……ピッ。

「んー」

ひどい夢を見た気がする。誰かに殺される夢だ……最悪の目覚めだな。勘弁してほしいよな、まったく……

そう思いながら胸のあたりをさすって、ベッドから身を起す。

夢の詳しい内容はよく思い出せないが、胸に何かが刺さったような感触だけはハッキリと残っている。

刺されたことなんてないんだけどな……まあいいか。どうせただの夢だ、顔を洗って目を覚まそう。

誰もいないリビングで、学校へ行くための身支度を整える。

目に入ったリビングのテーブルには、「帰りが遅くなるので夕食は好きに食べるように」と書かれたメモとお金^{かね}が置かれていた。

俺の家族は父親だけで、母親は俺が赤ん坊の頃に亡くなったそう。

俺は当時赤ん坊だったため、当然母さんの記憶はない。写真に写っている若い頃の姿しか知らない。

そのせいで、小さい頃は母親を求めて泣いたこともあったようだが、まあ片親なら誰もが通る道だろう。

それに父子家庭ながらも、父さんはいつも俺を気にかけてくれていた。忙しい仕事の合間を縫って、学校行事にも積極的に参加してくれた。その分の埋め合わせとして、休みの日に仕事をすることも多かった記憶がある。

一人、部屋で過ごす俺は、それを寂しいと感じながらも、仕方のないことだと理解していた。そういえば……しばらく手を合わせていないな。

ふとそんなことを思い、俺は仏壇に飾られている母さんの写真に手を合わせ――
「行ってきます」と告げ、家を出た。

通学路を歩いていると、背後から声を掛けられた。

「おはよう。空」

「おう、おはよう」

声の方を振り返ると二人の男がいた。

幼稚園からの幼馴染であり親友の佐々木翼。

イケメンな上に文武両道で性格も良い。男女問わずめっちゃくちゃモテる。

まるで物語の主人公のような存在だ。

そんな翼と雑談しながら歩いていると、不意に今朝見た夢を思い出した。

「そういえば、今日夢の中で誰かに刺し殺される夢見てさー、寝覚め最悪だったんだよねー」

「そうなんだ……僕も最近、同じ内容の夢ばかり見るんだよ。もともと僕の場合は刺す方なんだけどね……」

翼は自分の手を見つめ、少し悲しそうな顔をした。

仮に俺と翼の夢の内容が同じだとしたら、俺を刺し殺したのは翼ということになる。仮に夢が本当だったとして、コイツに殺されるなら……

いや、やっぱり可愛い子に殺されたいな。直前まではアリかも？ と思ったが、どうせなら可愛い子の腕の中で息絶えたい。その子の心に俺という傷を負わせたい。できれば十年くらいは引きずってほしい……やっぱり一生引きずってもらいたい。

そんなアホな考えを、頭の隅に追いやり言った。

「まあ、仮に夢の男がお前だったら、殺されてやつてもいいけどな。その時は優しく殺してくれや」

笑いながら言うと、翼は少し怒りながら否定した。

「たとえ夢だとしても、空を殺したいなんて思わないよ……」

「……そうか」

空気が重くなってしまったので、話題を変えるために授業の話を持ち出した。

「そういえばさ、昨日出された数学の課題まったくやってないんだわ。答え教えてくんね？」

「……まったく、写すのはいいけど。今度、埋め合わせはしてよ？」

「もちろん！ いやー頼りにしますよ翼さん！」

持つべきものは、やっぱり親友だよな！ 俺は親友に感謝の気持ちを抱きながら、他愛のない会話を交わしつつ、学校へ向かった。

その後、普段通り学校に到着し、また普段通りクラスへ向かった。

ちなみになんの奇跡か、俺と翼は小中高ずっと同じクラスだった。

なんでだろう？ 別に教師に希望を伝えたことがあるわけでもない。本当に自然とそうなった。どちらかが風邪で休まない限り、俺たちは一緒に登校していた。

翼と登校する俺にジェラシーを感じる女子もいるみたいだが、妬むのはやめてほしい。教師に言えよ教師によー。

多分これからもそんな関係がずっと続くのだと、その時はそう思っていた。いつも通り、翼が教室の扉を開けると、目の前が強烈な光に包まれた――



眩しさが消え、目を開けると。

そこには、見慣れた教室ではなく――見渡す限りの草原が広がっていた。

「……………え？ なにこれ」

あまりに理解不能なことが起きると、思考が停止するのを初めて知った。

停止した脳みそが活動を再開すると、最初に浮かんだのは「ドッキリ？」という言葉だった。

いやいやいやいや、ちょっと待て。俺は直前の行動を思い返す。

えーっと、いつも通りの時間に学校に着いて、それから翼が教室の扉を開けて――あつ。

「そうだ！ 翼は!?」

慌てて周囲を見渡すが、自分以外に誰もおらず、風になびく草原が広がっているだけで、そこに翼の姿はなかった。

「一体、何が起きたんだ……」

そうつぶやき、頭を抱えその場にへたりこんだ。

しばらく思考が止まっていたが、荷物を確認することにした。

服は制服のままで。背中に背負っていたカバンの中身も無事。

ここがどこなのか確認しようと立ち上がり、すぐにスマホを取り出すが、画面には「圏外」の二文字が表示されていた。

「……もしかして、ここって異世界なのか？」

漫画やアニメでよく見る異世界に来てしまったのではないかと考えた。トラックに轢かれた覚えはないんだけどなあ。

足元の草を観察したが、専門知識がないので地球産かどうかもわからない。ちぎってみるも普通の草だ。味は……にっが！

再度周囲を見回し、ふと空を見上げると異変に気づく。

「太陽が……二つある」

ここが日本どころか、地球ですらないとすぐに理解した。

太陽のような天体の隣に、それより二回りほど小さな太陽が浮かんでいた。

――太陽が二つ。

あれは本当に太陽なのか？ どうやらここでは俺――というか地球の常識が通じないらしい。雲

一つない快晴のもと、再び頭を抱えた。

まずは今後を考えねば……ひとまず、ここが異世界だと仮定して動こう。

こういう場合、神様のような存在が現れ、チート能力や便利な道具を授けてもらえるのが定番だ。しかし、いくら待っても神様のような存在は現れそうにないし、謎の白い空間に行く気配もない。この線は諦めよう。

次は、ステータス画面とかそんなのが表示される系だよな。

少し恥ずかしいが、誰もいないんだ……ゴホン。

「ステータスオープン！」

シーン。

「……出ねえ。ステータス！ プロフィール！ メニュー！ ファイアーボール！ うおおおおお！ エクスプロージョン!! ……なんも出ねえ!」

地面に拳を叩きつけ、叫んだ。

「クソゲーやんけ!」



そして冒頭に戻るつと……

やはり今朝の出来事を思い返しても、異世界に転移するようなこれといったきっかけは見当たらない。

教室の扉を開けたのがきっかけなのか？ そんなのがきっかけなら、今頃この草原は異世界人であふれてるわ！ ええい、ここで座つていても埒が明か^あかない。

俺は立ち上がり、この草原を抜け出すべく歩き出した。

どれくらい歩いただろうか……左側に森があるものの、それ以外は変わらず、草、草、くさあ！ 見渡す限りの大草原!! くそ……なんでも代わり映^はえのない風景が続くん^だ。

せっかく異世界に転移するなら、もうちょいマシな場所にしてくれよ……お城とかさあ。そうじゃないにしても、草原スタートはひどすぎない？

俺は草原をひたすらあてもなく歩き続けた。とりあえず森が左側に来るようにして歩けば、どこかに着くだろう。

そう思っていたが、正直このままではマズイ。早く人の痕跡^{こんせき}を見つけないければ、餓死^{がし}ルート一直線だ……意識したら腹が減ってきたな。

一応カバンの中には、学校に向かう途中に朝飯にするつもりで買ったパンが一つに、水のペットボトルが一本入っている。

朝食を食べずに家を出てしまったので腹が減ってきた……食べてもいいよね？ ダメダメ！ こ

こは我慢だ、この先何があるかわからないだし。

……クソっ！ 早く、早く人の住む町を見つきたい……！

俺はさらに足を前に進めた。

「……ん？ なんか見覚えがあるな、この場所」

草原を歩いていると、どこかで見たような場所が目に入ってきた。

この草原の草は膝の高さほどあり、歩くと自然に踏み倒しながら進むことになる。そして目の前の見覚えある場所には、草が踏み倒された形跡が残っていた。

左側には相変わらず森が見えている。

……これはもしかして、あの森を中心に一周してしまったってことか？ 思い返してみれば、真っ直ぐ進めていなかったもんな。

木が密集していたから大きな森かと思っていたが、実際は草原の中にポツンとある小さな森だったのか。

いやー、すっかり勘違いしていたな……いやいやいや！ だとしたらマズイ！

太陽もだいたい傾き始めている。このままではここで夜を過ごす羽目になってしまう。それだけは、どうしても避けなければならない。

アオオオオン。

不意に、何かの遠吠えが聞こえてきた。

さすがの俺でも、その意味することはわかる。すぐに周囲を見回すと、かなり遠くに灰色の何かが見えた。

やばいやばいやばい。遠吠えから察するに、どう考えても狼のような生き物に違いない。今すぐこの場を離れ——って、どこに行けばいいんだよ！

突然訪れた命の危機に、泣きそうになる。

もうイチかバチか、森の中に逃げこんで木の上でやり過ごすしかない。俺は森に向かって必死に駆け出した。

遠くから、何かが迫ってくる気配を感じる。

もう少しで森の中に入る。そう思った——

森の手前で、突然足が止まった。

言いようのない嫌悪感が、森の中から伝わってきた。

この中へ入ってはいけない。

そう本能が語りかけているように感じる。

けども今はそんなこと言ってられない。もう後ろには、狼が迫ってきている。

俺は意を決して森の中へ飛びこんだ。

すると、先ほどまで迫っていた狼は足を止め、森の外側から遠巻きにこちらを見つめていた。

改めて見るその姿は大きく、鋭い牙と爪をむき出しにして唸っており、今にも飛び掛かってきそうに感じた。

俺はその姿を目にして、近くの茂みの中に身を隠し、地面に這いつくばったまま体を震わせることしかできなかった。

それからどれほどの時間が経ったのだろうか。狼の姿はもうなかった。そのことに気づいた時には陽が沈み、星の光だけがあたりを照らしていた。

そこは月と星明かりに支配された世界。

都会で生まれ育った俺にとっては、初めて目にする光景だ。

手の届く範囲から先は闇に沈み、暗黒が広がっている。

とてもじゃないが、動く気にはなれない。すぐそばの木に登り、落ちないよう気をつけながら、上着を頭から被り、スマホから漏れる小さな光を見て心を落ち着かせた。

そこでようやく気づいた。

森に入る時に感じていた嫌悪感が、いつの間にか消えていたことに――



「――はっ」

目に飛びこんできたのは一面の葉っぱで、そこが慣れ親しんだ自分の部屋ではないことを告げていた。

いつの間にか眠ってしまったようだ。まさか木の上で眠れるなんて、我ながら器用なことをするもんだと感心してしまった。

慎重にあたりを見回しながら森の中の気配を探る。

そして昨日の狼がいないことを確認してから木を降りた。

一応、遠吠えや生き物の鳴き声は聞こえない。だが唯一聞こえてくるのは――
ぐうっ。

俺の腹が情けない音を立てた。

腹が減った……丸一日何も食べていないんだから無理もない。

水を何度か飲んだが、腹を満たすには程遠いし、こんな状況では水も貴重だ、大切に飲まなければいけない。パンについても、本当に限界になるまでは取っておきたい。

周囲に何かないか……できれば木の実とか果物がいいんだが……

そう都合良く食料があるはずもなく、だがその中で、見覚えのある植物を見つけた。

アレは——タンポポか？ たしかテレビで苦味はあるものの、生で根っこまで食べられると見た記憶がある。

さっそく一つ摘み取り眺める。

綿毛になる前の色鮮やかな黄色い花。

背に腹はかえられぬと、口に入れ咀嚼すると——

「オエエエツ!!」

強烈な苦みとえぐみが口いっぱいに広がり、飲みこむことを体が全力で拒絶するほどのひどい味だった。

お、おとおお……なんだこれ、不味い。不味すぎる……！ 舌が痺れるし、視界までチカチカしてきた。ど、毒でも入ってたのか……!?

しばらくその場でえずき、ペットボトルの水を飲んで吐き戻すことを数回繰り返し、ようやく症状が治まった。

……くそつ、迂闊すぎた。そうだ、ここは異世界。もとの世界と同じタンポポなわけがない。

もう駄目だ、一刻も早く人のいる所まで行かないと死んでしまう……！

森の入り口まで進み、茂みに身を潜めながら周囲を確認する。

……よし、いない。行くなら今のうちだ。



森から抜け出て、一度振り返ると――

昨日感じた、あの嫌悪感が再び襲ってきた。昨日は無我夢中だったから入れたが、気分が最悪な今となつては、とてもじゃないが足を踏み入れる気にはなれない。すぐに目を背け、森を背にしたまま駆け出した。

「うおおおおおおお！」

俺は草原を全力で駆けていた。

あれから森を背に、真っ直ぐ進んだ先に小高い丘を見つけた。

すぐにそこに登り、あたりを見回すと、少し距離があるところに石畳のような人工物を発見した。おそろく街道だろう。その石畳を指して、すぐに俺は走り出した。

――走り出したまでは良かった。

昨日とは別の、一回り小さな狼が俺のあとを追ってきたのだ。

石畳までもう少しというところで、俺はカバンの中に残していたパンを取り出し、時間を稼ぐために狼に向かって投げつけた。

狙いは的中し、狼はパンに食いつく。その際に距離を稼ぐべく、俺は全力で石畳へと駆けた。

無事に石畳へたどりつき、肩で息をしながら左右を見る。

街……らしきものは見えない。ヤバイ、詰んだ。

そう思った時、視界の端に何か動く物が見えた。

――馬車だ！

そう、石畳の片側から、ゆっくりと馬車が走ってきたのだ。

実物を見るのは初めてだが、漫画やアニメでよく目にする形をしている。

馬に似た動物が二頭、馬車を引いている。遠目から人が乗っているのを確認し、ようやく異世界で人に会えたことに安堵した。

助かったと思い、馬車に向かって駆け出す。すると馬車はゆっくりと速度を落とし、やがて少し離れた位置で止まり――

ピュンツ、と正面から顔の横を何かが掠め、直後に後ろから「ギャンツ」という悲鳴じみた鳴き声が響いた。

思わず振り返ると、さっきまで俺を追ってきた狼がすぐ背後に迫っており、その眉間には矢が一本突き刺さっていた。

予想外の出来事に茫然と立ち尽くしているうちに、馬車の荷台から四人の男が降りてきた。

鎧を着た男が二人。残りの二人は、鎧ではなく革の防具を身に着けている。四人がそれぞれ剣や弓といった武器を手をしているのを見て、俺はさらに固まってしまった。

ここが異世界なら価値観は日本とは根底から違うはずだ。そもそも、言葉が通じるかすら怪しい。助かったと思ったが、そんな保証はどこにもないのだと実感した。

すぐに両手を上げて、無害であることをアピールした。というか、それ以外は敵対行為とみなされるだろう。

「何か用か？」

鎧の男が剣の切っ先を向けながらそう言った。

なぜかはわからないが、とりあえず言葉は通じるようだ。ただ、相手は武器を持っていて俺は丸腰。冷や汗が止まらなかった。狼に追われている時のように体が震えるのを感じた。

恐怖で固まっている俺を怪しんだのか、四人が武器を構え、臨戦態勢に入ろうとしていた。

「た、助けていただきありがとうございます！ ま、街に行きたいのですが、どの方向へ向かえばいいでしょうか!？」

このままではヤバイと感じ、噛みながらも情けない声でそう答えた。

剣を向けている男は仲間の顔をチラリと見たあと、遅れて顔を覗かせた小太りで立派な髭をたくわえた人物に判断を仰いだ。

「だ、そうですが、どうします？」

小太りの人物は少し考える素振りをし、俺を上から下に値踏みするように見たあと、口を開いた。「そうですね……まあいいでしょう。困っているみたいですし、街まで乗せてあげましょう」

この人、良い人だ！ 単純かもしれないが、昨日と今日の出来事で俺の精神はだいぶ参っていたので、疑うことなく素直にその厚意に甘えることにした。

「ありがとうございます！」

丁寧に頭を下げ礼を述べ、四人の屈強な男に囲まれながら、馬車の荷台に乗った。

自己紹介しつつ、荷台で体を小さくして座っていると、五人がいろいろと話しかけてくれた。

まず、小太りの人は商人でカールという名前らしい。

隣町に商品の仕入れをした帰り道で、俺と出会ったのだという。

そして、最初に馬車から降りてきた四人は「シルバーファンク」というパーティ名で、冒険者をしていると教えてくれた。

四人のリーダーで戦士のマルコ。タンクのハルク。狩人兼斥候のシール。魔法使いのアル。

今向かっている「ドレスラード」という街で生まれ育った幼馴染で、一緒に冒険者をしているそうだ。

話してみると、五人とも気さくに対応してくれた。

初対面では殺気立っていたが、知らない人間がいきなり馬車を止めたので盗賊だと思ったのだそう。たしかに逆の立場だったら俺も警戒すると思う。

途中からカールさんがマルコさんと馬車の運転を交代し、カールさんが俺のことを根掘り葉掘り聞いてきた。

俺のことといっても、俺が着ている学ランが珍しいのか、どこでその服を仕入れたのかとか、誰が作ったのかということについてだ。

「日本の市販品を買ったので」なんて言えるはずもない。突然異世界から来たと信じてもらえないだろうし、厄介事の種になりかねない。

この世界が異世界人に対してどういうスタンスなのかわからない以上、隠す必要がある。それに異世界産の学ランは仕入れられない。

それで、死んだ育ての爺さんがどこかで買ってきた品ということにしておいた。その買った場所も、どこかわからないということも添えて。

それから、咄嗟にありもしない設定を考えながら話を合わせた。ちなみに、出自は山に捨てられていた赤ん坊の俺を、爺さんが拾い育てたという設定にしておいた。とんだ野生児である。

ところでカールさん曰く、学ランに使われている布の質がかなり良いらしい。

移動手段に馬車を使うぐらいだ。技術力は、もとの世界の方が圧倒的に上なのだろうと推測する。そこで俺の頭に閃きが走った。学ランを売れば、当面の生活費が手に入るんじゃないかと。

「ちなみにこの服を売るとしたら、どれくらいで売れますかね？　ちよつと汚れちゃっていますか……」

それに、断言するが、この格好では絶対に目立つし、昨日森の中で地面に這いつくばったせいで少し汚れてしまったから、別の服が欲しい。

「そうですね……少し汚れてはいますが、穴も空いていませんし——これくらいの金額ですかね」
そう言われて提示された金額を見ても相場がわからないし、そもそも紙幣の価値がわからない。

正直な話、買い叩かれている可能性もある。しかしここは——

「ぜひ。お願いします」

手っ取り早くこの世界の金が入るのなら乗るしかない。もっとも、騙されているなければの話だが、ここはカールさんを信じるしかない。

俺との話を終えたカールさんは、馬車の御者席に戻った。多分俺との交渉が目的だったのだろう。入れ替わりで戻ってきたマルコさんが言った。

「そういえば、街に着いたら何をするつもりなんだ？」

「そうですね……伝手もないので、貯金を切り崩しながら働ける場所を探してみます」

貯金といっても、カールさんからの買取金以外にあてがない。その金がなくなる前に、何か仕事を見つけないといけない。

「それなら、冒険者になったらどうだ？　街の依頼を毎日こなせば、少なくとも生きていくことはできるぞ」

「冒険者というと……魔物と戦ったりするんですよね？　俺、魔物と戦ったことないですよ？」

「一応、ギルド内で戦闘訓練やほかにもいろんなことを教えてくれるから、なんとかなると思うぞ」

「なるほど、少し考えてみます」

「ああ、選択肢の一つとして考えておくといい」

冒険者か……うん、^ザ異世界の職業 っで感じで、案外アリかもしれないな。

魔物と戦う自分の姿を想像して、ちよつとテンションが上がってきた俺をよそに、ハルクさんが言った。

「それにしても随分と汚れているが〈清潔魔法〉は使わないのか？」

「……？ 何ですかソレ」

聞いたことのない単語だったので素直に聞き返すと、ハルクさんから驚きの声が上がった。

「おいおい。まさか^{せいかつまほう}生活魔法 を知らないのか？」

続けて、マルコさん、シールさん、アルさんも口々に言う。

「さすがにそれはないだろう、ガキでも使えるんだから」

「山奥で育ったのに、魔法を使わないで生活してたのか？ 普通に無理だろう」

「それはさすがに爺さんが偏屈すぎるな」

設定で作った爺さんが、とんでもない変人になってしまったが……異世界から来たとは言えないので、そのまま俺は世間知らずの男という設定を貫くことにした。

「あははは……ちなみに生活魔法というのは、どういうものなんですか？」

異世界人である俺は世間知らずなんだ。聞くは一時の恥^{はじ}と言うくらいだし、知らないことは今のうちに聞いて、少しでもこの世界の知識を身に付けるとしよう。

「魔法の中でも、特定の五つの魔法をまとめて生活魔法と呼んでいるんだ——」

その後、アルさんが教えてくれた百年前のある物語。

異世界からシズク・ミズノという女勇者がこの世界に召喚されたという。

当時は魔王という存在が現れ、世界は戦乱に包まれていた。

だが、シズク・ミズノとその仲間たちの活躍により、魔王は討伐された。

しかし、戦いのあと、彼女はいつの間にか消息を絶ったという。

その際に、彼女が開発した魔法が五つ。

〈収納魔法〉 ^{アイテムボックス}

これは異空間に物を収納できる魔法で、魔法陣に手を突っこむと任意の物を出し入れできる。非生物なら大抵のものが収納でき、中に入れた物の時間が止まるという。容量は個人差があり、これに関しては完全に本人の資質^{ししつ}によるそうだ。

そして、デメリットとして、使用者が死ぬと中身を取り出せなくなるので、事実上この世から消える扱いになる。それでもなおチートだと思う。

〈清潔魔法〉 ^{クリーン}

体や指定した物の汚れを綺麗にする魔法で、汚れは分解されて大気中の魔素^{まそ}に変換される。大抵の汚れはこの魔法で消えるので風呂にもあまり入らないらしい。便利すぎる。

〈照明魔法〉 ^{ライト}

一定時間、光源を作り出す魔法。主に部屋の照明として使われる。

〈着火魔法〉

指先にライター程度の炎を出す魔法で、料理などに使用される。

〈水生成魔法〉

掌から水を出す魔法で、魔力を注ぎ続ける間、清潔な水を生成し続ける。主に飲料水として使用される。これも地味にヤバイ。

この五つの魔法を、シズク・ミズノは旅の途中で敵味方を問わず各地に広めたという。「皆の生活が良くなればそれでいい」、ただそれだけの理由で、彼女は五つの魔法を教えて回ったのだ。

——シズク・ミズノ。日本での名乗り方をするなら水野雫か？

おそらく俺と同じ日本からこの世界に転移してきた人物だろう。思わぬところで同郷の人間の話聞くことができた。ほかにそういう人がいるのだろうか。

俺が異世界からの転移者であることを知らないシルバーファングの面々は、そのまま話を続けた。「生活魔法なら、一度見れば誰でも使えるようになるのに使えないのか？」

アルさんはそう言った。

見るだけで魔法が使えるようになるの？ この世界の魔法ってそんなに簡単に使えるのか？ い

や、生活魔法とかいうのが規格外なだけなのかな。

「生活魔法に関しては、一度見ると頭の中に、魔法陣とその魔法の使い方が浮かんでくるんだよ」

「なにそれ、すごい」

魔法が存在する異世界とはいえ、これは規格外すぎる。シズク・ミズノは化け物か……もしかしてチート持ち？ ならば、俺のやるべきことは決まった。

「良ければ見せてもらえませんか？」

頭を下げてお願いすると、アルさんが五つの魔法を順番に見せてくれた。

魔法を目にした俺は、さらに衝撃を受けることになった。

《〈収納魔法〉〈清潔魔法〉〈照明魔法〉〈着火魔法〉〈水生成魔法〉を習得》

頭の中に謎の声が響くと、五つの魔法の使い方が自然と浮かんできた。

その直後、脳を鷲掴みにされたような激しい痛みと不快感が俺を襲う。

「イデデデデー！」

頭を押さえて悶絶していると、周囲の面々は「最初は皆そんなものだ」と笑っていた。先に言ってくれよ！

痛みが治まり、一息ついてから、実際に〈収納魔法〉を発動してみた。

「〈収納魔法〉——おお！ す、すごい！」

呪文を唱えると魔法陣が現れ、その中に手を入れてみると、「なるほど、こんな感じか」と納得した。

何もないう空間を一通り弄つてから、日本から持ってきたカバンを魔法陣に入れ、〈収納魔法〉を解除する。

再度〈収納魔法〉を発動し、カバンを取り出す。

なるほどね。目で見えているわけではないが、取り出したい物が自然と手元に来る感覚だった。さらに、〈収納魔法〉内に何があるのかも、頭の中に思い浮かんできた。

そしてもう一つの気になる魔法を唱えることにした。

「〈清潔魔法〉」

俺の汚れた服に〈清潔魔法〉の魔法を掛けたところ、土に汚れた学ランがみるうちに綺麗になつていった。ついでに汗をかいていた全身が、お風呂上がりのようにサッパリとするのを感じた。

「す、すごい！ これが魔法か！」

初めての魔法に興奮していると、周囲の面々から優しい眼差しを向けられた。魔法のない世界で育ったんだから仕方がないじゃないか……

やがて、そんな俺をよそに、カールさんたちの目指す街「ドレスラード」が見えてきた。

ちなみに、今いる国の名前は「アガレームヴ王国」というらしい。

目指しているドレスラードは「アネモス家」という代々「風属性」を持つ貴族が治めており、カールさんとマルコさんたち曰く、住みやすい街だとか。

遠目からでも大きな城壁が街をぐるりと囲んでおり、その外側には広大な畑が広がっていた。日本ではまず見られない光景。

初めて見る異世界の街に、俺はただ言葉を失っていた。

そのまま街道を進み、街の入り口へとたどりついた。

大きな門の前には鎧姿の兵士が四人いて、出入りする者を確認している。

冒険者、商人、その他と列が分かれているようで、俺たちは商人の列に並んで順番を待った。

やがて俺たちの番が来て、カールさんから順に水晶に手をかざしていく。

わけもわからず俺も真似をして手をかざすと——水晶が白く輝き、その場にいた五人が一斉に驚いた。

「……ま、街にも入ったことがないのか……」

なぜか五人がハモってそうつぶやき、俺は苦笑で誤魔化する。

「へへへ……」

「君、ちよつと来なさい」

「——はい」

当然そのまま街には入れず、俺は別室へと連れていかれた。カールさんたちが事情を説明してくれたおかげで、俺は水晶に自分の魔力の波長を登録するだけで済んだ。

その最中、登録していない理由を問われたので、道中で考えておいた通り「山奥で暮らしていて外界と関わりがなかった」と答えると、「そういうこともあるか」と納得された。一定数そういう人間がいるらしい。

あとから聞いた話では、魔力の波長は指紋のようなもので、水晶で照合するのは街に入る際の犯罪歴チェックが目的だという。青が基準、黄色は軽犯罪歴あり、赤は指名手配犯。登録していない人間は白く光るので、俺が白く光ったのもそのためだった。

無事に登録を終えて外に出ると、カールさんたちが待っていてくれた。

ちなみにこのあとは、カールさんのお店で制服を買い取ってもらうことになっている。

「やっと来たか。それじゃあカールさん、俺たちは依頼完了ということで失礼しますね」

マルコさんがそう告げ、俺を囲んで別れの言葉をくれる。

「冒険者になるなら、まずはギルドに登録しろよ？」

「またな」

「ギルドはあの建物だから、間違えるなよ」

「何かの縁だ。困ったことがあったら相談に乗るからな」

「はい、短い間でしたがお世話になりました」

シルバーファングの面々と別れ、俺はカールさんの店へと向かった。

カールさんの店は中規模で、特定のジャンルに特化せずにさまざまな品を扱っていた。

約束通り着ていた制服をカールさんに渡し、絹の服が上下二着ずつ、革の胸当て、革の籠手と脛当てといった安価な防具。そして、魔物の革を張った木製の盾と片手で扱えるショートソードを選んだ。

カールさん曰く「新米冒険者らしい格好」とのこと。これ以上の性能の良い装備を選ぶと、今後の生活費が尽きてしまうため、このあたりで抑えておくのが良さそうだ。

もっと良い装備を揃えられるように頑張ろうと、そう心に決めた。

選んだ商品を差し引いた残額に加え、カバンの中に入っていた筆記用具はこの世界には存在しない品だったため、売ったところそこそこの額が手に入った。

「ありがとうございます」

「またのお越しをお待ちしております」

カールさんに礼を述べ、次に目指すは冒険者ギルドだ。

俺は異世界での新たな第一歩を踏み出した。



冒険者ギルドへ向かう道中、街並みを眺めながら歩いた。

そこには、ファンタジー作品でよく見るような、中世ヨーロッパ風の木造建築が多く立ち並んでいた。

目的地である冒険者ギルドは、石造りの大きな二階建ての建物だった。

壁に掲げられた旗には、冒険者ギルドのマークである「羽ばたく鳥の姿」が描かれていた。「自由に羽ばたけ」的な意味なのだろうか。もしかしたら別の意味なのかもしれないが、今は気にしないでいいか。

緊張しながら扉を開けて中に入ると、そこにはさまざまな冒険者たちがいた。フルプレートたしゅうたようの鎧姿や肌の露出が多い服装の人々、獣人やエルフにドワーフなど、まさに異世界ならではの多種多様な種族であふれていた。

おお、これが異世界。すげえ！

小学生並みの感想を抱きながら扉の前で立ち尽くしていた俺に、声を掛ける人物がいた。

「よお。やつと来たか」

シルバーファングのマルコさんだ。

俺がカールさんのところで装備を整えてギルドに向かうことは伝えていたので、職員に紹介するために待っていてくれたそうだ。初めて出会った異世界の人々が、皆良い人すぎて軽く感動した。

ちなみに、ほかの三人は家族が待っているのここには来ないとのこと。

「よし！ さっそく紹介しようじゃないか。ついてきな」

「はい。お願いします！」

俺は素直にマルコさんのあとを追いつ、受付のようなカウンターに向かった。

「よう、アイリ。新人を連れてきたんだが、面倒めんどうを見てやってくれないか？」

受付にいた女性にマルコさんが気軽に話しかける。

金髪でロングヘアの綺麗なこの女性はアイリさんというらしい。日本ではあまり見ないタイプの顔立ちだ。

「あらマルコさん。珍しいですね、新人さんの面倒を見るなんて」

「まあな、山育ちで生活魔法すら知らなかった常識知らずでな、ギルドのことをいろいろと教えてやってくれ！」

マルコさんは笑いながら俺の背中を叩くと、アイリさんに俺のことを託たくしてそのままどこかへ行ってしまった。

最後まで面倒を見られる気はないんですね……まあいいさ、一から十まで面倒を見てもらおうなんて虫が良すぎるからな。

笑いながら去っていくマルコさんから視線を戻し、アイリさんに話し掛ける。

「初めまして、ソラといいます。冒険者に登録したいのですが、試験とかあったりしますか？」

そんな俺の問いに、アイリさんは微笑みながら答えてくれた。

「試験はありませんよ。登録自体は誰でもできますが、いくつかの注意事項を守り、当ギルドや街に不利益となる行動をしなければ問題ありません」

「なるほど、では登録させてください！」

俺に冒険者になる意思がある、と判断したアイリさんが説明を始めた。

「まずは、この紙にお名前をご記入ください。このあと魔力の属性を診断いたしますが、事前にわかつている場合は自己申告でも構いません」

紙を受け取り、言われた通りに名前を書いてみた。

日本語と同じ感覚で書いてみたが、不思議なことにこの世界の文字に変換されて記しるされていた。

良かった。読み書きもできない子にならずに済んだ……え、でも何これ、どういう原理なんだ？ 謎の現象に軽く混乱しながらも、属性については調べたことがないと伝えた。

「それでは測定用の魔道具を取ってきますので、少々お待ちくださいね」

アイリさんは一度受付の奥へ行き、水晶を持って戻ってきた。

ここでも水晶か……そう思いながら手をかざすと水晶は——黒色に染まり始めた。それは光さえも呑みこむような黒。

まるでそこだけ空間が抜け落ちたかのように、ぼつかりと黒い穴が空いているみたいに見えた。

……もしかして闇属性か？ 異世界に來たんだし、光属性とか全属性とか、そんなチート展開じゃないの？ 正直な話、迫害はくがいスタートは勘弁してほしい。

「ほかの色は……見えないですね。属性は闇だけです。珍しい、初めて見ました」

どうやら俺の魔力は、闇属性で決まりのようだ。

「闇……ですか。迫害されたりしないですよね？」

「ふふ、大丈夫ですよ。珍しいというだけで、同じ闇属性を持っている冒険者の方もいますから」

「そうですか……」

良かった、迫害スタートはなさそうだ。

「ところで、ほかにはどんな属性があるんですか？」

「ええっと、基本の属性は、火・水・風・土・光・闇の六つです。そのほかにもいろんな種類がありますが、大抵の方は火・水・風・土の中の二種類の属性を持っています」

「ということは、光と闇は基本の属性の中ではレアなんですね？」

「ええ。光属性は主に教会関係の方に多い傾向がありますね。光とほかの属性を持っているパターンが多いです」

基本は二種類の属性で、その中でもさまざまな組み合わせがあるようだ。

「なので、一つの属性に特化している方や、三種類以上の属性を持っている方は珍しいんですよ」

「なるほど……」

俺は闇の力で無双するしかないようだな……少し楽しくなってきたぞ！

「――では、最後に確認いたします。お名前はソラ。属性は闇。この内容で登録を行ってよろしいですか？」

「はい、お願いします」

属性もわかったので、登録を進めることにした。

「――はい、それでは登録は以上となります。初めての登録ということで、一番下の『鉄』ランクからのスタートになります。コチラをどうぞ」

一枚のカードを手渡され、ランクの説明を受けた。

「ランクは一番下から『鉄』、『銅』、『銀』、『金』、『白金』の順になっております。ソラさんは登録したてなので、一番下の『鉄』ランクからスタートです。頑張ってくださいね」

カードを掲げ「おおっ」と声を漏らしていると――

「坊主。冒険者になったらまずすることがあるよな？」

「そうだぜ、ちよつと面貸しな」

「へっへっへ、な〜に悪いようにはしねえよ」

筋肉モリモリマッチョマンが三人寄ってきた。

これが新米冒険者への洗礼というやつか……アイリさんへ助けを求めようと振り返るも、すでに

別の作業へと移っていた。

マジか……

ガタイのいい三人の冒険者に囲まれ、どこかへ連れていかれる俺は、チワワのように震えることしかできなかった。

「ここが『鉄』ランクの依頼が掲示されている掲示板だ」

「最初は街の雑用や薬草採取がおすすめだぜ」

「へっへっへ、あんまり欲を出して実力に見合わない依頼を受けると、大変な思いをすることになるから気をつけな」

……めちやくちゃ親切な人たちだった。

その後、ギルド内を案内され、各施設の説明までしてくれた。見た目に反して、とても良い人だ。おそらくアイリさんもそれを知っていたから、彼らに任せただろう。

……せめて、一言くらい欲しかったよね。

案内してくれた先輩方に礼を述べ、冒険者ギルドをあとにした。

登録も無事に終えたので、今日の宿を探さなければならない。

ギルドには無料で泊まれる部屋があるらしいが、あまり設備は良くないらしく、異世界初心者俺にはハードルが高すぎる。

まだ日が暮れるまで時間はある。幸い文字は読めるので、街を散策しながら探すことにした。

ブラブラと街を歩いていると、また声を掛けられた。

「おっ、ソラじゃないか。登録は終わったのか？」

振り返って声の主を確認すると、鎧を脱いだ私服姿のマルコさんが立っていた。

「はい、お陰様で」

「そうか。ところで、今は何をしているんだ？」

「えーっと、今日泊まる宿を探しています」

「宿屋を探してるのか？ ならおすすめの所があるぞ、ついてきな！」

何やら心当たりがあるらしいマルコさんのあとをついていった。



「着いたぞ。ここが俺の勧める宿『シャリー亭』だ！」

そこにはごく普通の宿屋が建っていた。事前の説明では、朝晩の食事付きでリーズナブルに泊まれる宿だそうだ。

マルコさんは宿に入り、主人であろう男の人に声を掛け、俺の紹介をしてくれた。

その人も筋肉モリモリで、めちゃくちゃデカイ……

「ソラといいます。しばらく泊まりたいのですが、空きはありますか？」

「ああ、いいぞ。ちょうど一部屋空いてるからそこを使うといい」

制服と手持ちのあれこれ売った金がまだあるので、この宿の宿泊代なら、一ヶ月は働かなくても泊まれそうだ。

この宿の料金はその都度前払い制で、一週間分を先に払うことにした。

宿屋は食堂も併設されており、食事するというマルコさんとはそこで別れ、俺は部屋へと案内された。部屋の広さは三畳くらいで、木製の簡単なベッドと机と椅子が置いてあるだけだった。

これが……異世界クオリティか。

鍵は内側から掛けられるようになってるが、外からは掛けられないようだ。貴重品や荷物は鍵は内側から掛けられるようになってるが、外からは掛けられないようだ。貴重品や荷物は

〈収納魔法〉で持ち歩けるので、問題ないか。

部屋は寝るだけのスペースがあればいいのかもしれない。

少し部屋で休み、夕日が窓から差しこみ始めた頃――

そう言えば昨日から何も食べていないことを思い出し、夕食を食べに食堂のある一階へ向かった。夜になると食堂は酒場になるそう。酒を飲んでるマルコさんと一緒に食べることにした。

夕食は野菜とウサギ（魔物）の肉のスープに、硬いパンだった。

スープの味は薄めで、硬いパンをスープに浸して柔らかくしてから食べるのが一般的なのとか。

意外とウサギの肉がうまかった。

初めての異世界飯は、思っていたほど抵抗のあるものではなかったし、腹が減っていたのもあって満足できた。

ちなみに、マルコさんはぐでんぐでんに酔っぱらっていたので、食事を終えた俺は彼を放置して部屋へ戻ることに。

異世界でもこういう大人がいるのは変わらないか……

腹も満たされ、硬いベッドに寝転がり一息つくくと、全身を疲労が包み、抗えぬ眠気が襲ってきた。ただの高校生が異世界に放り出されて、身一つで生きていく羽目になったんだ。疲れない方がどうかしている。

硬いベッドでも、昨日の木の上と比べたら天国だ。

外敵のいない安全な室内でぐっすり寝られる。そんな当たり前のことが今の俺には何よりも嬉しかった。

すぐに寝たい気持ちを押し殺し、今後のことを考える。

それにしても、これからどうしようか……そう簡単に日本に戻れるとは思えない方がいいよな。残してきた父さんや友達のことを考えるも、今の自分ではどうすることもできない。

戻るなら戻りたいが……俺は魔法という非日常を知ってしまった。いつそのこと開き直ってこ

の世界を楽しむか？ その上で日本に戻る手段を探すのがいいかもしれない。

それにせっかく冒険者になったんだ。俺も一人の男として「白金」ランクを目指すのもいいかもな。

その方が、もとの世界に帰るための情報を手に入れやすくなるかもしれない。うん、そうしようよし！ まずはこの世界で、冒険者のランクを上げて、ちゃんとした生活基盤を作ろう。

日本へ帰る手段を探るのは、それからでも遅くはないだろう。

そういえば、勇者シズクは途中で行方不明になったらしいし、もしかしたら彼女は帰る手段を見つけた可能性もある。

そうなると、勇者の痕跡を探るのが一番の近道かもしれない。勇者のことが書かれている書物を読めば、少しは手掛かりが掴めるだろうか。

まあなんにせよ、まずは戦う力を身に付けるのが最優先だな。

とりあえず今日はもう寝よう、明日のことは明日考えればいい。

草原にいた時よりはかなりましなんだから……

ベッドに横たわり、目を瞑るとすぐに意識を手放した。

——スヤア。



いつも教室の隅すみにいる男の子がいた。

クラスは同じで、最初の頃はいなかったのに、いつの間にかそこにいた。

そんな男の子のことが気になり、俺は声を掛けた。

「おれはそらってゆーんだ。おまえは？」

「え、ぼくは……つばさ」

「つばさか！ おれといっしょにそとであそぼうぜ！」

俺は翼の手を取ると、そのまま外へ連れ出した。

「空、誰だその子？」

「つばさ！ きょういっしょにあそんだんだ！ なっ？」

「え、う、うん」

「そうか。空、翼君と仲良くしろよ？」

「とうさん。もうなかいって、なっ？」

「う、うん……」

翼は少し照れくさそうにしていた。



ゴーンと鐘かねの音が聞こえ、俺は目を覚ました。

「――夢、か」

随分と懐かしい夢を見たものだ。

幼稚園の頃、翼と初めて会った時の記憶。

今思えば、もう十年以上の付き合いになるのか……まさに親友と呼ぶに相応ふさわしい男だ。

なんでか知らないが、俺みたいな男にいろいろと良くしてくれていたっけ。

父さんが大事な仕事で家に帰れずにいる中、俺が熱を出して暗い部屋に一人でいた時も、一番に

駆けつけてくれたな。

その時の父さんは、翼に感謝の言葉を何度も口にしていたのを覚えている。

父さんは今、何をしているのだろうか。

伝言もなく、二日も帰らない俺に文句もんくの一つでも言っているかもしれない。母さんも亡くなって、俺までいなくなってしまうんだ。今、どんな気持ちでいるのだろうか……

もとの世界に戻ることはできるのかな……もし戻れないとしても、せめてこちらの世界で元気に

やっていると伝えられる方法はないだろうか。

翼にも、俺は元氣だと伝えないと。

そうと決まれば、まずはこの世界に慣れることから始めよう。

何といつても、ここは剣と魔法のファンタジーな世界なんだし！

そんなことを考えていると、腹からぐうと音が鳴った。

……まずは腹ごしらえだな。

身支度を済ませ、朝食を食べに一階の食堂へ向かった。食堂では、宿の主人が朝食の準備をしていたので声を掛ける。

「おはようございます」

「ん？ ああ、おはよう。よく眠れたか？」

「はい、ぐっすり寝られました」

実際、疲れもあつたのでよく眠れた。寝る直前に何か考えてた気がするけどなんだっけか……

いろいろ考えていたけど……そうだそうだ、まずは生活基盤を整えて、もとの世界に帰る方法を探すんだった。まずは飯を食って今日何をするのか決めよう。

席に座ると、主人が朝食を運んでくれた。昨日のパンに肉と野菜を挟んだ、いわゆるサンドイッチのような料理。

肉の味付けが濃いめだったので、パンと野菜とのバランスがちょうどいい。うめつうめつ。

食事を終え、異世界生活三日目をどう過ごすか考えた末、まずは冒険者ギルドへと向かうことにした。

冒険者ギルドに着いて最初にすること、それは「鉄」ランクの掲示板の依頼の確認だ。

依頼には、「常設依頼」「通常依頼」「緊急依頼」「強制依頼」と四つの種類がある。

【常設依頼】 基本的にギルドが依頼主で、常に張り出されている依頼を意味する。

【通常依頼】 街に住む人が冒険者を雇いたい時に主に出される依頼。

【緊急依頼】 魔物の討伐がメインで、街の周辺で緊急性の高い事案が発生した際に揭示される。

【強制依頼】 一定のランク以上は拒否できない依頼を指す。街に早急な対処が必要な非常事態であることが多い。

昨日、筋肉モリモリマッチョマンの三人からそんな説明を受けていた。

なので「鉄」ランクの俺には常設依頼か通常依頼ぐらいしか選択肢がない。初めは地道にコツコツいこう。

……どの依頼を受けようか。ドブさらいや草むしりに畑の収穫の手伝いから、薬草採取にホーン

ラビットとかいう魔物の討伐までいろいろある。

掲示板の前で唸っていると、不意に肩を叩かれた。

誰だ？ そう思っただけで振り返ると、二日酔いなのか、青い顔をしたマルコさんと大きな盾を背負った女の子が立っていた。マルコさん、出会って二日目なのに遭遇率が高いな。

「よお。今から依頼を受けるのか？」

「はい、そのつもりです」

すると、隣に大きな盾を背負った女の子が口を開いた。

「マルコさんにあたしの薬草採取に付き合ってもらっただけどー、一緒にどお？ たしかうちに泊まってる人でしょー？」

「うちってことはシャーリー亭の関係者？」

「そだよー。あそこあたしの実家なんだー。でさー、マルコさんから昨日冒険者ギルドに登録したての人がいるって聞いて。声掛けたんだよねー」

ということとはあの主人の娘ってこと？ 申し訳ないが全く似ていない。

髪の色は茶髪で、おさげのように髪を二つに結んだ可愛らしい女の子だった。

身長は俺よりも低く、どう見ても年下のように見える。というか年下だろう。見るからに年下の子が、俺よりも先に冒険者をしているという事実^{きょうがく}に驚愕した。

そして同時に、誘ってくれるのはありがたいが……昨日登録したての新人を誘うメリットはない

気がするんだけどなあ、と思っていた。

「あっ！——ちなみにあたしもこの前登録したばかりだから、同じ新人だよー」

あっ、なるほど。同じ新人で実家の宿に泊まっていて、マルコさんとも顔見知りの俺に声を掛けたというわけか。

理由は理解したけども、問題があるとするならば、俺は右も左もわからないガチ初心者ということだ。ぶっちゃけ足手まといだと思う。

「そういうわけだからさ。ソラも良かったらどうだ？ 薬草採取は、今後のためにもいい勉強になると思うんだよ。一人や二人増えたところで、手間は変わらないからな」

青い顔をしたままのマルコさんも、そう言ってくれた。そういうことならお言葉に甘えるでしょう。

俺にとっても悪い話ではないので承諾した。

それはそれとして。

「死にそうな顔をしていますけど、大丈夫ですか？」

「あー大丈夫、大丈夫。ただの二日酔いだよ。出発までには直しとくから。大丈夫。ホントに」

お、おう。大丈夫というのなら放っておいて、目の前の子に自己紹介をすることにした。

「それじゃあ改めまして。ソラといいます」

「あたしはシャロです！ ソラさんよろしくねー!!」

シャロというのか、元気いっぱいな子だ。泊まっている宿の娘だし仲良くしようじゃないか。

◇

俺たち三人は街を出て三十分ほど歩き、近くにある森へとやってきた。

「そういえばさー、マルコさんとソラさんってどういう関係なの？」

「どういう関係？ 街に向かう時に知り合ったくらいの仲……かな？」

素直に答えると、マルコさんも同意した。

「カールさんの依頼で、こっちの街に戻る途中で拾ったんだよ」

「そうなの？ ってことは一人で旅できるくらい強いってことー？」

「いやー、魔物と戦ったこともないんだよね」

俺がそう言うのとマルコさんは驚いていた。

「お前……生活魔法も知らなかったし、魔物と戦ったこともないのか？ どうやってあの街道まで来たんだ？ いや、それよりもよく今まで生きてこれたな」

ごもつともな疑問。「異世界から転移してきたから！」だなんて言えるわけもないし……どう答えたものか。

「生活魔法使えないって本当にー？」

「ああ、本当なんだよ。育ての爺さんが偏屈でさー」

設定で作り出した偏屈爺さんのせいにした。サンキュー爺さん。

とはいえ、何の理由もなく無傷で街道までたどりついたというのは無理がある……どうせ使い道もないし。ここは、グレ^グを使うか。

「爺さんの死に際に、この魔道具を渡されてね。これのおかげで無傷でたどりつけたんだよ」

そう言って、^{アイテムボックス}〈収納魔法〉からスマホを取り出した。

この世界にスマホなんてものは存在しないだろう。見せるリスクもあるが、魔道具の一種ということにすれば納得してくれるだろうと俺は考えた。

ちなみに初日にいろいろ使った結果、現在はバッテリーが切れて動かなくなってしまった。一度きりしか使えない魔道具、ということにしておいた。

「へー！ こんな魔道具あるんだ！。初めて見たー」

「魔物除けの効果が付与^ふされてる感じか？ 一度きりしか使えないなら、それなりに強力なやつなのかもな」

あとで知ったことだが、魔道具には一度しか使えない使い切りタイプと、繰り返し使えるタイプの二種類があるそうだ。

そういうわけで、使い切りのスマホのおかげで街道まで無事にたどりつき、マルコさんたちに保護された——ということにしておいた。